

# クブラーの芸術論と芸術の伝播に関する考察

大阪芸術大学 教養課程 教授 小谷訓子

この研究では、20世紀の美術史家ジョージ・クブラーが1962年に発表した*The Shape of Time*を取り上げ、クブラーの芸術論を礎に「芸術の伝播」の問題を考察することに、どのような妥当性があるのかを明らかにした試論である。

クブラーは、彼の担当したペンギン・ブックスのペリカン・シリーズ2冊(1959年と1962年に出版)で知られているように、基本的には先コロンブス期アメリカとイベロアメリカの、それも主として建築を専門とする研究者である。数多くの著作を残しているが、その中でも、とりわけ*The Shape of Time*は、彼の芸術論として、その後の建築史・美術史研究や芸術家の作品制作に多大な影響を与えてきた。当然のことながら、様々な言語に翻訳され、2018年には『時のかたち』として日本語でも出版されている。論者は、かねてからクブラーの芸術理論をベースにしたケース・スタディや作品分析に取り組んでいるが、本研究は、クブラーの芸術論そのものを研究対象にし、その成り立ちの歴史や構造を確認しながら、論者が長年研究している「芸術の伝播」の問題についてクブラーの考え方をを用いることが適切であるか否かを考察した。

イエール大学に学んだクブラーの、美術史家としての始まりは、1933年に彼がドイツ留学から帰国した時である。それまでは、英文学やスペイン文学、トマス・マンなどに興味を持っていたクブラーが、当時アメリカに移住してきたフランスの美術史家アンリ・フォションと出会って彼に師事したことで、美術史研究に方向転換をしていく。その後クブラーは、イエール大学で修士号を取得し、奨学金を獲得した上で、ニューヨーク大学の美術研究所(Institute of Fine Arts)に移り、博士論文の研究に取り組む。当時の美術研究所には、ウォルター・W・S・クックや、エルヴィン・パノフスキーが在籍していたこともあり、クブラーにとってそこは、美術史研究に従事するための適切な場であった。イベロアメリカの美術史研究という専門分野の方向性も、彼の博士論文も、この頃に形作られたようである。1938年にはイエール大学の教員として迎えられ、師フォションの代表作である*Vie des forms* (1934)の翻訳にも従事した。後にクブラー

自らが「*The Shape of Time*にまとめた芸術論は、*Vie des forms*を出発点に構想した」と語ったことは、正に文字通りで、単に「読む」だけでなく「翻訳」をしたことで、クブラーの*Vie des forms*の理解が深遠であったことは明白である。

フォションの芸術論は、美術史研究における三大方法論、即ち、伝記的解釈論、様式論と、イコノロジーの中では、様式論の集大成だと捉えられている。それに対して、クブラーの芸術論は、それまでの方法論から解放されたもの、即ち、新たな選択肢として提示された方法論であるといえよう。*The Shape of Time*は、その後1980年頃に台頭したニュー・アート・ヒストリー、つまり現在の視覚文化研究(Visual Culture Studies)を支える芸術論の一つとして先駆的に且つ挑戦的にクブラーから発信された視座なのである。執筆の開始は、クブラーが1959年に結核で入院した頃だそう。 *The Shape of Time*が発表された1962年には、彼の2冊目のペリカン・シリーズも出版されたが、ペリカン本については入院の数ヶ月前に既に原稿を提出していた状況であった。つまり、*The Shape of Time*は、ペリカン・シリーズの大きなプロジェクトを2冊分こなし後に構築された理論なのである。そしてこの時系列は、彼の芸術論が、単に師フォションの芸術論を叩き台に「理論ありき」で構想されたのではなく、帰納法的に個々のケースを分析していった末に導き出されたものであるということを証明する。本研究においては*The Shape of Time*で纏められた論点そのものに加えて、その理論装置によって分析がより深まる芸術作品や事象のケースを個々に例証しながら、考察をまとめていった。そして「芸術の伝播」の問題を論じる際には、*The Shape of Time*の導きに照らし合わせながら議論を展開し、その議論のポイントを参照しながら、クブラーの芸術論の位置付け、枠組み、限界について明らかにすることに努めた。